AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2015.2) 15,1:18-26.

卒乳・断乳の決定に影響を与える要因

笹川 朝子, 黒田 緑

旭川医科大学研究フォーラム 15　：18 ～ 26，2014

投稿論文

卒乳・断乳の決定に影響を与える要因

笹　川　朝　子*・黒　田　　緑**

【要　　旨】

本研究は母親が卒乳・断乳を決める際に、どのような要因に影響を受けているのかを明らかにすることを目的とした。1 歳 6 か月児を持つ母親のうち授乳を終了しているもの 74 人を対象とし調査した結果、卒乳群は 21 人（28.4%）、断乳群は 52 人（70.3%）であった。卒乳・断乳の理由と各因子間の関連における重回帰分析の結果、授乳終了には「子が自然に飲まなくなった」（標準偏回帰係数（以下、β とする）$= -0.87, P < 0.001$）場合がもっとも大きな要因であった。次いで、母子間のコミュニケーションが機能し、母子間のみではあるが意志の疎通ができるようになったこと（$\beta = -0.25,\ P < 0.001$）で、母子の間に信頼関係が築かれることが卒乳に影響を与えていた。一方、母親の因子である「乳房のトラブル」（$\beta = -0.19,\ P < 0.001$）は断乳の決定に関与していることが明らかになった。

キーワード　卒乳、断乳、母乳育児、授乳

緒　言

授乳の終了について松永[1]は「断乳は、母親にとって子どもとの身体的分離であり、子どもとの新たな関係を形成する出発点である」、「その過程で母親の思いは常に揺らいでいた。」と述べている。授乳の終了時に母子は不安を抱いていると考える。母子の不安や授乳終了の際の苦痛や迷いを軽減し、母子にとって自然な形で授乳を終了することがその後の母子関係に良い影響を与えると考える。本研究は、卒乳・断乳の実態と、卒乳・断乳のどちらかを決める際の影響因子は何か、その後の母子の納得感等を明らかにすることを目的とした。

研　究　方　法

1. 研究方法：本研究は、授乳終了の決定に際して、母の要因として、精神的項目、社会的項目、身体項目、授乳項目、子の項目の 5 項目と、子の要因として、発達項目、コミュニケーション項目、摂食項目の 3 項目を考えた。また、授乳終了後、母の身体的・精神的にどのような変化がみられたか、子に身体的ストレス、行動・摂食の変化がみられたかを明らかにすることを目的とした。（図 1）

2. 研究対象：2008 年 6 月から 8 月の 3 か月間に 1 歳 6 か月健診を受ける児を持つ母親を対象とした。

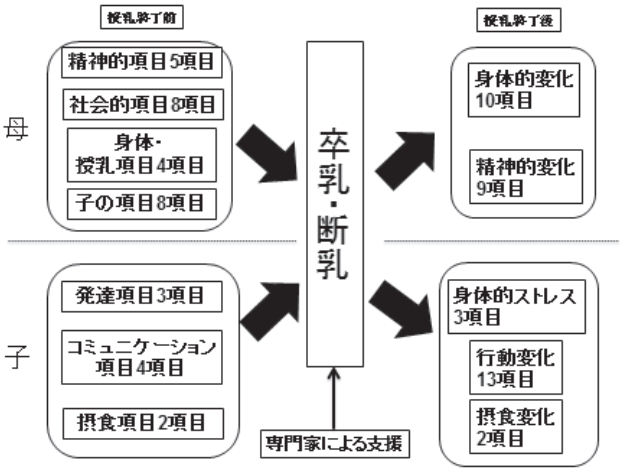

図 1　研究概念図

*元旭川医科大学医学部　看護学講座　**旭川医科大学医学部　看護学講座

3. 調査方法：1 歳 6 か月健診を受ける児を持つ母親への健診のお知らせ郵送時に母親への質問紙調査票を同封し、1 歳 6 か月健診来所時に回収した。

4. 調査項目：対象者の属性、栄養方法・卒乳・断乳方法等基本的事項、および母親の授乳終了前は『精神的項目』5 項目（4 件法、得点範囲 5 ～ 20 点、高得点ほど授乳終了前に負の感情を感じていたことを意味する）、授乳終了後の『母の身体的変化』10 項目（4 件法、得点範囲 10 ～ 40 点、高得点ほど授乳終了後に身体的症状がみられたことを意味する）、『母の精神的変化』9 項目（4 件法、得点範囲 9 ～ 36 点、高得点ほど授乳終了後に負の感情を感じていたことを意味する）、『母親の納得感』について、各 4 件法にて調査した。次に、授乳終了の理由 20 項目の中から卒乳・断乳の決断に強く影響したもの 3 つを選択してもらった。授乳終了の理由 20 項目とは、母親の『社会的項目』8 項目（2 件法、得点範囲 8 ～ 16 点、高得点ほど授乳終了の理由に社会的影響を選択していたことを意味する）、『身体・授乳項目』4 項目（2 件法、得点範囲 4 ～ 8 点、高得点ほど授乳終了の理由に身体・授乳の影響を選択していたことを意味する）、母親が授乳終了の理由とした『子の項目』8 項目（2 件法、得点範囲 8 ～ 16 点、高得点ほど授乳終了の理由に子の状態を選択していたことを意味する）、とした。子の授乳終了前は、『子の発達項目』を 3 項目（2 件法、得点範囲 3 ～ 6 点、高得点ほど子の発達がすすんでいる）、『コミュニケーション項目』4 項目（2 件法、得点範囲 4 ～ 8 点、高得点ほどコミュニケーションがすすんでいる）。「摂食項目」2 項目（2 件法、得点範囲 2 ～ 4 点、高得点ほど離乳が進んでいる）とした。子の授乳終了後について、「子の身体的ストレス症状」3 項目（2 件法、得点範囲 3 ～ 6 点、高得点ほどストレスがみられた）、『子の行動変化』13 項目（4 件法、得点範囲 13 ～ 52 点、高得点ほど授乳終了後にネガティブな反応がみられたことを意味する）、『子の摂食変化』2 項目（4 件法、得点範囲 2 ～ 8 点、高得点ほど授乳終了後の摂食に関して良い変化がみられたことを意味する）とした。また、専門家（医師、助産師、看護師など）による支援の有無・時期について調査した。

5. 用語の定義：子の出生後より生後 5・6 か月までの間主に母乳により栄養を得ていたものを「母乳栄養」、母乳と人工乳により主な栄養を得ていたものを「混合栄養」、主に人工乳により栄養を得ていたものを「人工栄養」とした。

卒乳とは、子どもと相談して納得してやめた[2]場合、または子どもから自然に飲まなくなった場合とし、断乳とは母親が意図的にあげなかった場合とした。また、母の「納得感」を母子が『これでよかったんだ』と承知すること、とした。

6. 分析方法：授乳終了方法において卒乳したもの（以下卒乳群）と断乳したもの（以下断乳群）に分け記述統計を行った後、調査項目ごとに平均点を算出し、Mann-Whitney 検定を行った。「母親の納得感」について、「納得している」と回答した群（以下納得群）と「納得していない」と回答した群（以下非納得群）に分け、各要件・変化について納得群・非納得別の平均点を算出し、Mann-Whitney 検定を行った。卒乳・断乳の理由と各因子間の関連を明らかにするために、重回帰分析（変数減少法）を行った。統計解析には SPSS12.0J を用いた。有意確率は $P < 0.05$（少数第 3 位以下切り捨て）とした。

質問紙の妥当性の検討は、事前にプレテストを行い、内容を再度検討した。また、要件ごとにクロンバックの α 係数を算出した。質問内容の妥当性の検討は、授乳終了前の母親の「子の項目」（クロンバックの α 係数 =0.44）、授乳終了後の「母の身体的変化」（α =0.88）、「母の精神的変化」（α =0.74）、授乳終了前の「子の発達項目」（α =0.46）、「コミュニケーション要件」（α =0.50）、「子の摂食変化」（α =0.75）、授乳終了後の「子の行動変化」（α =0.73）の 7 項目の内的整合性を確認した。質問紙の妥当性は、低いものであった。

7. 倫理的配慮：1 歳 6 か月健診対象児の母親に研究の目的と内容を記載した自記式質問紙調査票を郵送にて配布した。質問紙調査票には、研究への参加は自由意志によること、質問紙調査票は無記名とし、データ収集・分析、研究成果の公表・活用の何れの段階においても、個人が特定されることは無いことを明記した。質問紙調査票への記入をもって、研究参加の承諾を得ることを明記した。

結　果

1. 調査票の回収状況と研究対象の属性

対象者 368 人中、322 人から回答を得た（回収率 87.5%）。そのうち、母乳栄養 185 人（57.5%）、混合栄養 79 人（24.5%）、人工栄養 54 人（16.8%）、不明 4 人（1.2%）であった。また、母乳栄養であり、周産期の母体の健康状態、子の発達・発育に問題がない本研究の該当者 117 人のうち、有効回答は 111 人であった（有効回答率 94.8%）。そのうち授乳を終了しているものは 74 人（66.6%）、卒乳群 21 人（28.4%）、断乳群 52 人（70.3%）、不明 1 人であった。父母の年齢、児の出生体重、妊娠週数、体重、身長、出産方法、第何子か、児の性別に有意な差はみられなかった。（表 1）

2. 卒乳・断乳の現状

授乳終了時期は、全体（n=74）で平均 13.6 ± 2.9 か月（以下、平均値 ± 標準偏差）、卒乳群（n=21）13.0 ± 2.3 か月、断乳群（n=52）13.8 ± 3.1 か月であった。2 群間に有意な差はみられなかった。

授乳終了直前の 1 日の授乳回数は、全体で 3.7 ± 2.4 回 / 日、卒乳群 2.4 ± 1.7 回 / 日、断乳群 4.2 ± 2.5 回 / 日であった。断乳群の授乳回数は有意に多かった（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 2）

3. 卒乳・断乳前後の母子の身体面・精神面

1）卒乳・断乳前後の母親の身体面・精神面

授乳終了前の母親は、授乳終了の負担感を表す「精神的項目」は全体の平均値 12.2 ± 2.8 点、卒乳群 11.1 ± 2.7 点、断乳群 12.7 ± 2.8 点で、断乳群では授乳終了前に負の感情を抱いている母親が多い傾向があった（P=0.05,Mann-Whitney）。（図 3）

授乳終了の理由としての「子の項目」は全体の平均値 8.9 ± 0.7 点、卒乳群 9.6 ± 0.7 点、断乳群 8.5 ± 0.5 点であり、子の条件が授乳終了の理由に有意に影響を及ぼしていた（$P < 0.000$, Mann-Whitney）。（図 4）

授乳終了後の「母の身体的変化」は全体の平均値 20.1 ± 7.0 点、卒乳群 17.5 ± 5.1 点、断乳群 21.5 ± 7.4 点で、断乳群の母親は授乳終了後に身体的症状がみられた（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 5）

「母の精神的変化」は全体の平均値 20.0 ± 5.2 点、卒乳群 17.2 ± 4.5 点、断乳群 21.2 ± 5.2 点で、断乳群は授乳終了後に負の感情を抱いている母親が有意に多かった（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 6）

2）卒乳・断乳の前後の子の身体的・精神的変化

授乳終了前の子では、「摂食変化」は全体の平均値 3.4 ± 0.7 点、卒乳群 3.7 ± 0.5 点、断乳群 3.3 ± 0.8 点で、授乳終了前の卒乳群は離乳が進んでおり、断乳群の子

表 1　対象者の属性

項目		全体　n =74[1)]	卒乳群 n=21	断乳群 n=52	Mann-Whitney 検定
母年齢(歳)		30.7±4.6	31.8±4.3	30.3±4.8	0.34
父年齢(歳)		33.3±5.7	31.9±8.3	33.4±6.1	0.93
出生体重(g)		3055.1±393.5	3015.8±407.5	3075.2±392.9	0.61
妊娠週数(週)		38.9±1.2	38.6±1.2	39.1±1.2	0.14
現在の体重(g)		10.4±1.0	10.6±0.9	10.3±1.0	0.26
現在の身長(cm)		79.8±2.7	79.9±2.7	79.7±2.7	0.87
カウプ指数		16.3±1.1	16.6±1.2	16.2±1.1	0.14
出産方法（人）	自然分娩	64(86.5%)[1)]	18(85.7%)	45(86.5%)	0.87
	その他の分娩	2(2.7%)	0	2(3.8%)	
	帝王切開	8(10.8%)	3(14.3%)	5(9.6%)	
第何子か（人）	第 1 子[2)]	39(52.7%)[1)]	10(50.0%)	28(53.8%)	0.73
	第 2 子以降[2)]	34(45.9%)	10(50.0%)	24(46.2%)	
児の性別（男／女）[2)]		31(41.9%)/42(56.8%)	9(45.0%)/11(55.0%)	22(42.3%)/30(57.7%)	0.83

注）1) 卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2) 卒乳群に不明 1 名あり。

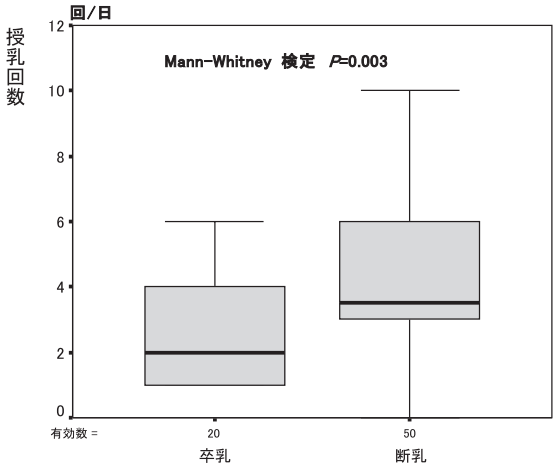

図 2　授乳終了直前の 1 日の授乳回数

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2）欠損値 3 あり。

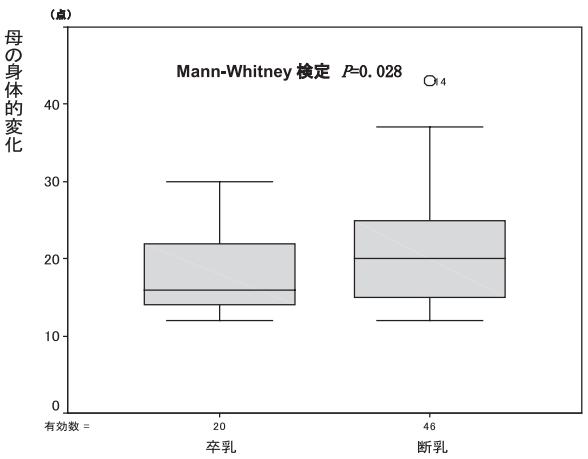

図 5　授乳終了方法と母の身体的変化（授乳終了後）

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2）欠損値 7 あり。

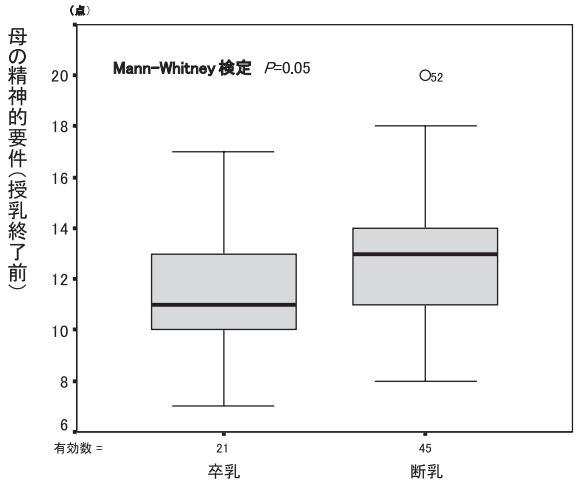

図 3　授乳終了方法と母の精神的項目（授乳終了前）

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2）欠損値 7 あり。

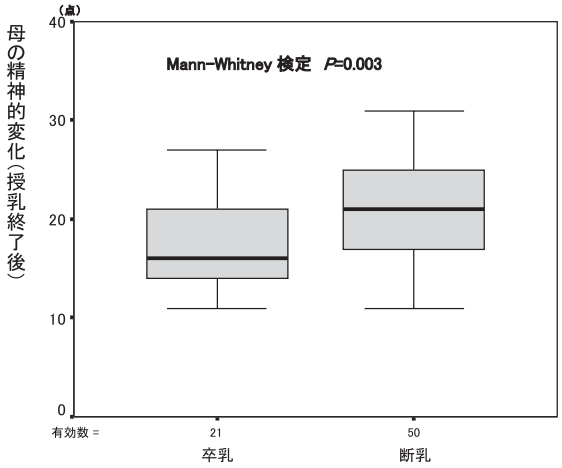

図 6　授乳終了方法と母の精神的変化（授乳終了後）

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2）欠損値 2 あり。

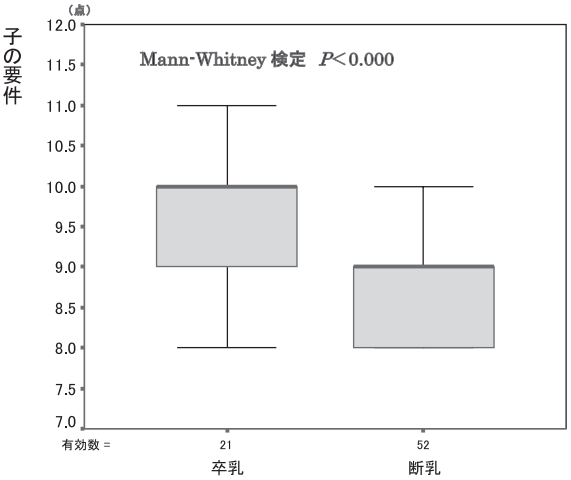

図 4　授乳終了方法と子の項目

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。

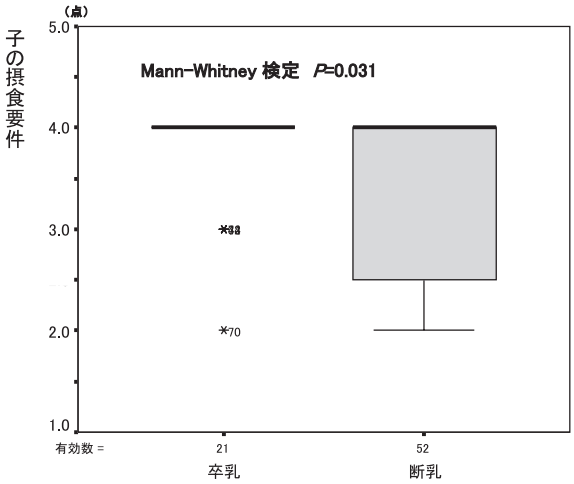

図 7　授乳終了方法と子の摂食変化（授乳終了前）

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。

は有意に離乳が進んでいなかった（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 7）

授乳終了後の子の変化は、「子の行動変化」は全体の平均値 23.1 ± 5.1 点、卒乳群 21.1 ± 4.6 点、断乳群 23.8 ± 5.1 点で、断乳群の子は授乳終了後にネガティブな反応が多くみられていた（P=0.05, Mann-Whitney）。（図 8）

4. 卒乳・断乳の理由

卒乳・断乳のきっかけと各因子間の関連において、最も影響を与えていたのは「子が自然に飲まなくなった」（$\beta = -0.87, P < 0.001$）、次いで「子が大人の言う簡単なことばをわかるようになった」（$\beta = -0.25, P < 0.001$）であった。母側の因子として影響を与えていたのは「乳房のトラブル（痛み・発赤など）がつらかった」（$\beta = -0.19, P < 0.001$）であった。また、調整済み R2 乗は 0.77 であった。（図 9）

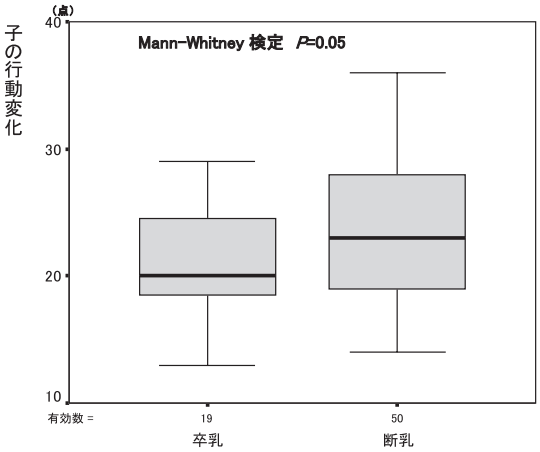

図 8　授乳終了方法と子の行動変化（授乳終了後）

注）1）卒乳断乳方法不明者 1 名あり。
　　2）欠損値 4 あり。

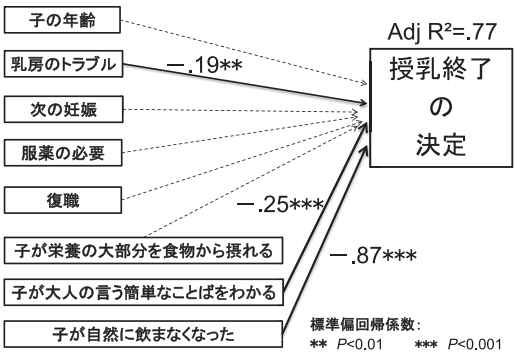

図 9　授乳終了の決定に影響を与える要因

5. 卒乳・断乳決定後の母子の納得感について

母親の「納得のいく形」での卒乳・断乳であったかについては、全体は納得群 65 人（87.8%）、非納得群 8 人（10.8%）、不明 1 人（1.4%）であった。

納得群と非納得群の 2 群間比較では、授乳終了後の「母の精神的変化」は非納得群 24.5 ± 3.3 点、納得群の平均値 19.8 ± 5.5 点で、授乳終了後の母親が負の感情を抱いていると母親の納得感は低かった（P=0.005, Mann-Whitney）。（図 10）

母親の納得感と子の授乳終了前の -「コミュニケーション項目」は非納得群 7.2 ± 0.9 点、納得群の平均値 6.4 ± 1.1 点で、両群間で有意な差が見られた（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 11）

また、「子の摂食変化」は非納得群 3.5 ± 1.0 点、納

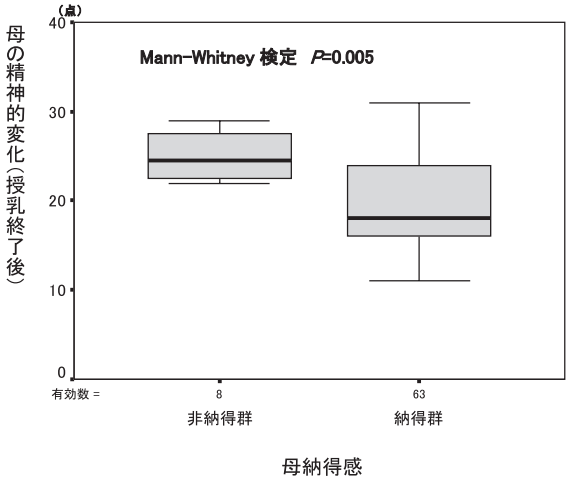

図 10　母の納得感と母の精神的変化（授乳終了後）

注）欠損値 3 あり

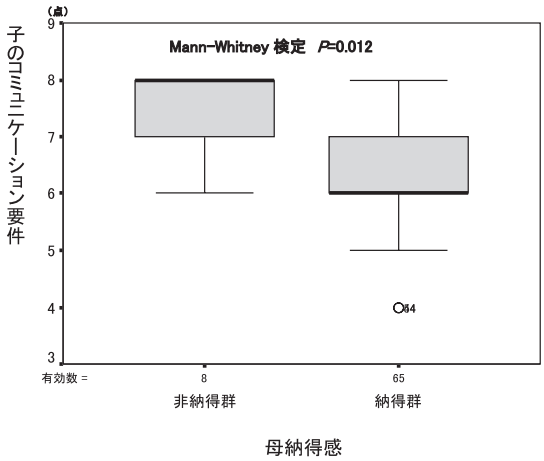

図 11　母の納得感と子のコミュニケーション項目

注）欠損値 1 あり

得群の平均値 3.5 ± 0.7 点で、有意な差がみられた（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 12）

授乳終了後では、「子の行動変化」は非納得群 28.7 ± 6.1 点、納得群の平均値 22.4 ± 4.5 点で、授乳終了後の子がネガティブな反応をしていると、母親の納得感は低かった（$P < 0.05$, Mann-Whitney）。（図 13）母の納得感と各項目・変化の関連について図 14 に示す。

6. 卒乳・断乳時の専門家の支援

卒乳・断乳に関する支援を受けたものは 19 人（25.7%）、受けていないものは 48 人（64.9%）、不明 7 人（9.5%）であった。支援を受けた時期は、「その他」12 人（断乳時 3 人、出産時以外の母親または子どもの入院時 3 人、定期的に 2 人、仕事復帰前 2 人など）が最も多く、次いで「1 歳時」5 人、「1 ヵ月健診時」2 人、「出産による入院中もしくは退院時」「3・4 ヵ月健診時」各 1 人であった。

考　察

1. 卒乳・断乳の現状

授乳を終了している母親のうち卒乳群 28.4%、断乳群 70.3% であり、龍ら[3]の結果と同様に断乳群が卒乳群の 2 倍以上であり、本研究においても断乳を選択する母親が多いことがわかった。卒乳・断乳した時期は全体の平均は 13.6 ± 2.9 か月であった。これまでの「1 歳前後までに断乳する」という慣習と同様の結果であった。

卒乳群の授乳回数は、断乳群よりも有意に少なかった。卒乳群は授乳終了前に離乳が進んでいる傾向がみられ、授乳回数が少ないことから多くの栄養量を離乳食から得ていると考える。

2. 母子の身体面・精神面

1) 卒乳群の母子の身体面・精神面

卒乳群の母親は、断乳群に比べて身体的な症状が少なく、負の感情を抱いている母親が少なかった。また、「子が自然に飲まなくなった」などの子の様子を理由として授乳終了していることが示唆された。

卒乳群の子の卒乳直後の様子では、身体的ストレス症状はみられず、子の様子もネガティブな変化は少なかった。卒乳群の子は卒乳後のストレスが少なかったと考える。

2) 断乳群の母子の身体面・精神面

断乳群の母親は、「乳房の緊満感」などの身体的な

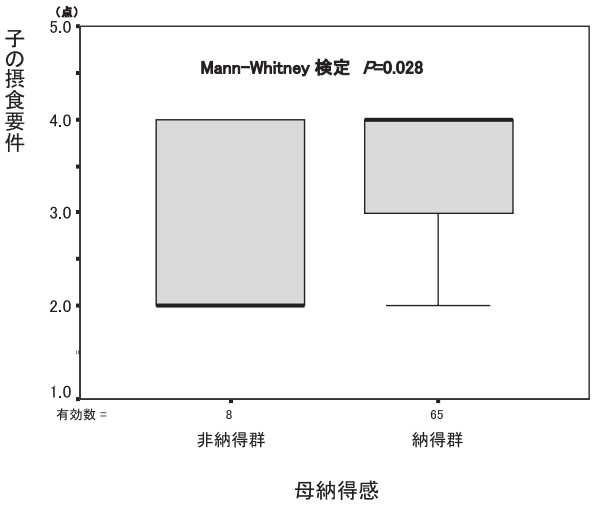

図 12　母の納得感と子の摂食変化

注）欠損値 1 あり

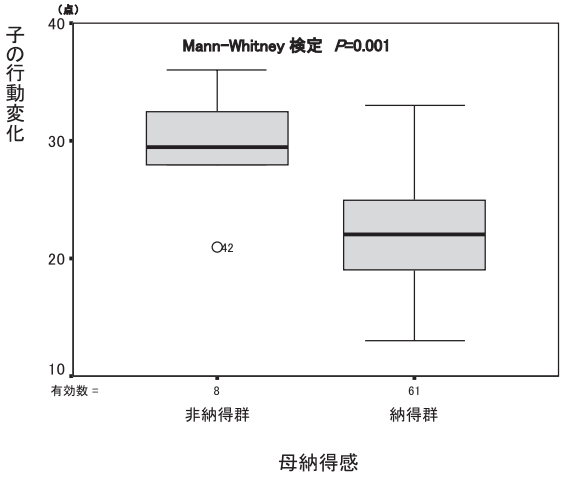

図 13　母の納得感と子の行動変化

注）欠損値 5 あり

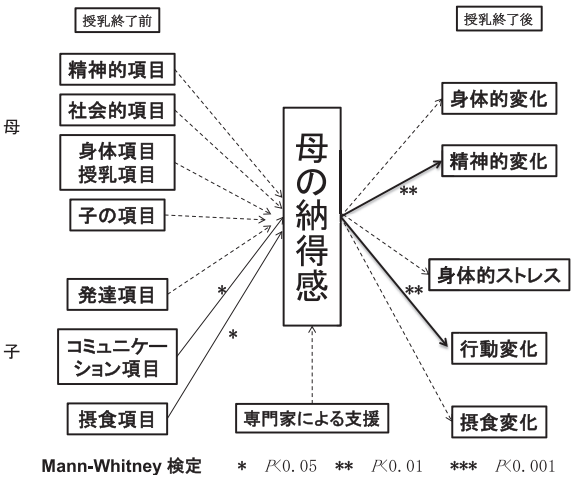

図 14　母の納得感と各項目・変化の関連

症状が多くみられた。断乳群は、授乳終了前の授乳回数が卒乳群よりも多かったため、身体的な症状が多く、辛い状況にあると考える。また精神面では、授乳終了前は「うまくいくか不安だった」などの負の感情を抱いており、授乳終了後は「後悔している」など負の感情を抱いていた。身体的につらい状況にある母親は、精神的な面でも負の感情に傾きやすく、その上断乳後の子のネガティブな反応を見ることにより、断乳群の母親は迷いが多く、気持ちが揺れ動きやすい状態にあると考える。

断乳群の子の離乳の特徴は、卒乳群より授乳終了前の離乳が進んでいなかった。これは、授乳回数と密接に関係していると考える。断乳群では多くの栄養量を授乳から得ていると考える。授乳終了後は、断乳群の子は卒乳群と比較して授乳終了後にネガティブな行動変化が多くみられる傾向があった。根ヶ山[4]は「離乳課程とは、依存と自立の混在した過程」としている。このことからも断乳後の子は、母親から一方的に子の主導性やレディネスを十分に考慮しないで行われる突然の授乳の終了に、子は自立を阻害されたと不全感やストレスを感じており、そのため断乳後にさまざまなネガティブな反応がみられていると考える。

3. 卒乳・断乳の決定に影響を与えている要因

授乳終了方法を決定する際には「子が自然に飲まなくなった」場合の影響がもっとも大きく、子の条件が非常に大きく影響したと考えられる。また、「子が大人の言う簡単なことばをわかるようになった」は、母子間のコミュニケーションが機能していることを示している。卒乳の決定には、子の条件が影響していると考える。

一方、「乳房のトラブル（痛み・発赤など）がつらかった」は、母の条件であり、断乳の決定に関与していると考えられる。

4. 卒乳・断乳と母の納得感

子が納得しないままに授乳を終了した場合、子とのコミュニケーションが機能している母親は、子の不満足を察知し、母の納得感を低下させたと考える。根ヶ山[5]は「相互の主張を交わしつつ相手を尊重して調整・譲歩をし、妥協点を探りあっていくという体験の積み重ねは、親と子どもの双方に親業・子業をこなしうるという効力感と相手への信頼を培う過程となる。」と述べている。本研究では母子間のコミュニケーションが機能し、母子の間でのみ伝わる方法などで相互に主張し調整・譲歩をし妥協点を探りあえるようになったことで、母子の間に信頼関係が築かれることが卒乳に影響を与えていたと考える。どちらか一方のみの主張で授乳を終了するのではなく、母子が相互に十分に主張し調整・譲歩し妥協点を探りあい、どちらも納得して授乳を終了するよう努力をしていくことが自然な形での授乳の終了であると考える。

また、授乳終了前の子の離乳が進んでいない場合、授乳回数が多く、その結果授乳終了後の母に身体的な症状があり、他方子にはネガティブな変化がみられる。授乳終了後の母の苦痛や子のネガティブな変化が、母の納得感をさらに低下させたと考える。授乳終了後では、子のネガティブな反応をみることは、母にとって授乳の終了に子が納得していないとの思いを抱かせ、母の納得感は低くなったと考える。またその結果、母親は授乳終了後に負の感情を抱き、さらに母の納得感を低下させたと考える。

5. 卒乳・断乳に関する支援

卒乳・断乳に関する支援を受けた母親は全体の 1/4 であった。また支援を受けた時期は不定期で母親が支援を受けるため自分から連絡等をしなければいけない現状が考えられる。

本研究では授乳終了時期は平均して 13.6 ± 2.9 か月であった。市町村による乳幼児定期健康診査は 3・4 か月健診以降、1 歳 6 カ月まで実施されておらず、その間は母親の任意受診となっている。この時期の全ての母親に支援を受ける機会が設けられていないことも支援を受けた母親が少なかった要因ではないだろうか。中尾ら[6]は離乳の時期は「母乳育児を楽しむというよりは、『いつまでお乳を飲むのだろうか』と先の見えない不安と拘束感に悩まされる不安定な時期にいる」と述べ、離乳（卒乳・断乳）時期に育児不安が高まるとしている。授乳の終了を母子が対話し、お互いに納得して授乳を終了することができるよう望ましい授乳の終了についての経験者や専門家の支援が必要と考える。

6. 本研究の限界と課題

授乳終了の状況は、大変個人差の大きい状況であると考えるが、本研究で使用した質問紙の妥当性が低いものであった点と、質問紙での回答であったため、個々の状況が把握しにくかったと考える。個別性が反映さ

れるよう今後研究方法を検討していく必要がある。

結　論

1）卒乳・断乳の決定に影響を与えている要因は「子が自然に飲まなくなった」、「子が大人の言う簡単なことばをわかるようになった」、「乳房のトラブル（痛み・発赤など）がつらかった」の３項目であることが示唆された。

2）卒乳群の母子は、卒乳後の身体的・精神的ストレスが少なかった。

3）断乳群の母親は、断乳後の身体的な症状が多く、負の感情を抱いていた。また、断乳群の子は、ネガティブな行動変化が多くみられる傾向があった。

（本研究は 2008 年度旭川医科大学医学系研究科修士課程修士論文の一部を加筆修正したものである）

謝　辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様と、市町村保健センターの皆様に心より感謝申し上げます。

文　献

1）松永佳子:断乳を受け入れるまでの母親のゆらぎ、日本助産学会誌、16 (1)、48 - 57、2002

2）堀内勁：断乳と卒乳 2. 卒乳、周産期医学、35、348 – 351、2005

3）龍美智子，　渡辺香奈 , 西カンナ , ほか：授乳法による乳離れ形態と母役割達成感尺度との関連（第１報）－卒乳と断乳に焦点をあてて－、母性衛生学会誌、47 (1)、89 – 98、2006

4）根ヶ山光一：離乳と母子関係：桶谷式断乳とラ・レーチェ･リーグ式卒乳の比較、行動科学、36 (1･2)、1 – 11、1997

5）根ヶ山光一：〈子別れ〉としての子育て、日本放送出版協会、2006

6）中尾優子 , 前田規子 , 宮原春美：「卒乳」乳離れ・離乳・断乳との概念関係に関する一考察、長崎大学医学部保健学科紀要、14（2)、65 – 69、2001

Factors affecting the decision of Sotsunyu (child-initiated weaning) and Dannyu (mother-initiated weaning)

SASAKAWA Asako*　　KURODA Midori*

Summary

The objective of this study is to demonstrate factors that affect mothers in making decisions of weaning (SOTSUNYU/DANNYU). The results of the survey with 74 subjects who had an 18-month-old baby were classified into two groups: the SOTSUNYU group had 21 subjects (28.4%) and DANNYU group had 52 subjects (70.3%). We conducted a multiple regression analysis, focusing on the correlations between the reasons and factors of the weaning and termination of breast-feeding. As a result, it was found that "the child stopped breast- feeding in the course of nature" (standardised partial regression coefficient $\beta = -0.87$, $P < 0.001$) was the most frequent factor for the termination of lactation. As well, the factor that mutual trust has been built between mother and child because communications between them began functioning and they could canalize their will just between them ($\beta = -0.25$, $P < 0.001$) affected the weaning. In addition, "trouble with the breast", which is a factor of the mother ($\beta = -0.19$, $P < 0.001$) was also found to have affected the decision of termination of breast- feeding.

Key words　child-initiated weanin, mother-initiated weaning, lactation, breast- feeding lactation

* Asahikawa Medical University, Department of Nursing